

霧島市内の遺跡から文字が書かれた土器が出土しています。石造物にも文字が刻まれたり、墨で字が書かれたりしているものがあります。

今回は、古代から中世に書かれた文字について紹介します。

### 出土する遺跡の性格と文字

過去に紹介したことがある墨書土器で、国分府中にある気色の杜遺跡から出土した「仮名墨書土器」。気色の杜遺跡は大隅国府跡の西端に当たる遺跡で、この土器に書かれた文字の内容から、国司たちが酒宴などを催した場所ではないかと考えられています。

文字は「ちとせは □とも さ□□ □あれ□」と短歌の下の句を思わせます。都から遠く離れた大隅の地でもうたげが開かれていたことが想像され、優雅な光景を思い浮かべられます。

大隅国分寺跡からも墨書土器が出土しています。大隅国分寺は天平13(7

## 郷土の扉

The gateway to local history

41)年に聖武天皇による「国分寺建立の詔」によって建てられました。建立には、仏教によって国家を病気や災害、戦争などから守る目的がありました。

この墨書土器には「鬼」という字が書かれ、文字と文字の間にはくると交差させた模様が入れられています。そのため、何らかのまじないで使われていたのではないかと考えられます。

気色の杜遺跡などのように、国分は役所でありつつ、公的や私的なうたげが開かれた場所ということが分かって

# 古代・中世の文字

います。国分寺では国家に災いが降りかからないようにお祈りが行われたと考えられます。このように、遺跡の性格と出土する文字資料にはつながりがあることが分かります。

### 石造物の文字

国指定史跡の「大隅正八幡宮境内及び社家跡」のうち沢氏館跡にある墓碑群には、梵字が刻まれています。中には墨で「南無阿弥陀仏」と書かれているものがあります。年代が記されていないため、いつごろのものか明確では

ありませんが、他の石柱などと同様に鎌倉時代のものであると考えられています。

国分郷土館の敷地には、市の文化財に指定されている「橘木城跡供養塔」があります。建武3(1336)年に造られたものと暦応4(1341)年に造られたもので、いずれも「南無阿弥陀仏」と彫られています。

鎌倉時代にはすでに浄土信仰が広まっており、供養塔に「南無阿弥陀仏」と記すことによって極楽浄土に往生した

いという当時の人々の願いが表れています。

沢氏館跡墓碑群の墨書と橘木城跡供養塔に彫られている「無」や「阿」の書き方などを見比べてみると、独特な表現が共通しています。

市内の遺跡では文字が書かれた土器が他にも見つかっており、石塔などもたくさんあります。今回はその一部を紹介しましたが、文字から当時の様子や人々の思いを知ることができるのです。

(文責＝坂元)



気色の杜遺跡から出土した仮名墨書土器



大隅国分寺跡から出土した墨書土器



墓碑に刻まれた梵字と墨で書かれた「南無阿弥陀仏」



橘木城跡供養塔

※古代インドのサンスクリット文字を書き写すために使われた。密教と結び付き、一文字で如来や菩薩などの仏を象徴する文字。